

男子体操競技審判員報告

審判長 近藤 昌夫

第 34 回全国高等学校体操競技選抜大会が宮城県利府町で開催されました。審判会議、監督会議では、男子体操競技情報 26 号について変更点を解説し、中でも着地に関するスモールステップの解釈が明確になったこと、あん馬におけるグループⅡ・Ⅲの技の成立について変更があったことを説明しました。

スモールステップに関してはゆか・跳馬だけでなく全ての種目で影響しているようでした。しっかりとした着地が今後とも必要とされます。

あん馬のグループⅡ・Ⅲの成立については、正面支持ではなく、その次に採点規則に載っている技に繋がった場合認定されるために、選手によっては不認定を受けたものもありました。夏のインターハイに向けても、再度情報 26 号の確認をお願いします。

競技中に起きた件として、つり輪での演技中のプロテクター破損がありました。これについてはその場で D1 審判が確認し、直ぐに審判長まで報告があったので、その組の最終演技者の後に再度演技をしてもらいました。

また鉄棒では手放し技の際にバーに顔を打ち、落下後には出血が止まらないため、60 秒以内の演技再開が不可能と判断し、プロテクター破損と同様にその組の最終演技者の後に落下後の演技の再開を認めました。当然、落下の 1.00 減点を伴う前提での再開でありましたが、結局最初の技で落下したために、ほとんど演技をやり直す実施となりました。この処置は今大会に限り特例といたしました。

演技以外で気になったこととして、公式練習が始まる前に器具に触れて練習する選手が複数いたと報告がありました。審判は会場に不在で、直接注意をできませんでしたが、今後同様な行為が見られた場合は不規律な態度として扱うことも検討します。また種目間移動がアナウンス前に行われたり、一人 30 秒アップが守られてなかったりした種目がありましたので、特に個人戦の場合は器具の調整も含めた時間も考慮して対応して頂くようお願い致します。

各種目での報告では、採点の方向性、今回の傾向、今後への期待等が記載されています。熟読していただき、今後の練習の参考にして下さい。

《ゆか》

D1E1 荒木 慎一

1. 会議で打ち合わせた事項

- ・ 2017 年版採点規則および情報 26 号の確認、終末技やニュートラルディダクションの適用。
- ・ 各減点項目の詳細確認。
- ・ 計時と線審の減点と得点票記入についての確認。
- ・ 演技の質と競技力を評価し、序列付けすること。
- ・ 規則改定後の演技と評価の傾向、及び判定の際どいケースの例。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ 姿勢によって難度が異なる技で、不完全な実施により選手の意図に反して、低い難度で判定した演技が数例あった。

- ・力静止技で不認定となった演技が数例あった。
- ・失敗により終末技が繰り返し（不認定）になった演技が1例あった。
- ・2回宙返りの無い演技が4例あり、ニュートラルディダクションを適用した。
- ・問い合わせはなかった。

3. その他特記事項

■得点上位者（3位まで）の演技構成

1位 橋汐芽（松陰） 14.350 Dスコア：6.0 Eスコア：8.350

前方かかえ込み2回宙返りひねり（E）、ロンダート～後転とび～後方かかえ込み2回宙返り2回ひねり（E）、前方伸身宙返り1回ひねり～前方伸身宙返り5/2ひねり（C+E）、ロンダート～後方伸身宙返り3/2ひねり～前方伸身宙返り2回ひねり（C+D）、開脚座から伸腕屈身力倒立（B）ロンダート～後方伸身宙返り5/2ひねり～前方伸身宙返り3/2ひねり（D・C）、ロンダート～後転とび～後方伸身宙返り3回ひねり（D）

2位 安達太一（市立船橋） 14.200 Dスコア：5.8 Eスコア：8.500 ND：0.1

前方屈身2回宙返り（E）、前方伸身宙返り1回ひねり～前方伸身宙返り5/2ひねり（C+E）、ロンダート～後方伸身宙返り3/2ひねり～前方伸身宙返り2回ひねり（C+D）、ロンダート～後方伸身宙返り2回ひねり（C）、フェドルチェンコ（C）、ロンダート～後方伸身宙返り5/2ひねり～前方伸身宙返りひねり（D・B）、ロンダート～後転とび～後方伸身宙返り3回ひねり（D）

2位 上山廉太郎（市立船橋） 14.200 Dスコア：5.9 Eスコア：8.300

前方屈身2回宙返り（E）、ロンダート～後方伸身宙返り5/2ひねり～前方伸身宙返り2回ひねり（D+D）、前方かかえ込み宙返り1回ひねり～前方伸身宙返り5/2ひねり（B+E）、ロンダート～後方伸身宙返り2回ひねり（C）、フェドルチェンコ（C）、ロンダート～後方伸身宙返り3/2ひねり～前方伸身宙返り1回ひねり（C・C）、ロンダート～後方伸身宙返り3回ひねり（D）

■Dスコア分布

6.0(1名) 5.9(2名) 5.8(3名) 5.7(1名) 5.6(2名) 5.5(8名) 5.4(3名) 5.3(7名)
5.2(5名) 5.1(3名) 5.0(1名) 4.9(5名) 4.8(5名) 4.6(2名) 4.5(3名) 4.4以下(5名)
0点(4名) 計60名

■実施された主な技（D難度以上）

【グループⅠ】

マンナ～伸腕屈身力倒立（D）：1名

【グループⅡ】（終末技以外）

前方かかえ込み2回宙返りひねり（E）：1名 前方屈身2回宙返り（E）：8名
前方かかえ込み2回宙返り（D）：16名 前方伸身宙返り5/2ひねり（E）：17名
前方伸身宙返り2回ひねり（D）：35名

【グループⅢ】（終末技以外）

後方かかえ込み2回宙返り1回ひねり（D）：5名
後方かかえ込み2回宙返り2回ひねり（E）：9名
後ろとびひねり前方かかえ込み2回宙返り（D）：2名
後方伸身宙返り5/2ひねり（D）：40名 後方伸身宙返り3回ひねり（D）：3名
後方伸身宙返り7/2ひねり（E）：2名

【グループⅣ】

後方伸身宙返り 3 回ひねり (D) : 37 名 後方伸身宙返り 5/2 ひねり (D) : 13 名
後方伸身宙返り 2 回ひねり (C) : 5 名 前方伸身宙返り 2 回ひねり (D) : 1 名

4. 所感

春先という事もあるが、高校生の試合としては失敗が多い競技会であったように感じられた。また、ラインオーバーについては 57 演技中 16 名が該当となり比率的に多く感じた。二回宙返り系の実施が見られないことによるニュートラルディダクションは 4 名の適用であった。大きな減点を受けるよりは、技を抜いた方が賢明だが、0.3 は競技力の低い選手層にとっては手痛い減点となっていた。情報 26 号により「小さな一歩」が足裏幅と明記された事が影響して、着地の多い種目としては E スコアの出づらいつ傾向が生じている。高校生でも多くの選手が、ひねり度数の高い技を多用する時代になってきたが、着地をまとめて E スコアを如何に残せるかが、今まで以上に課題となろう

《あん馬》

D1E1 濱崎 裕介

1. 会議で打ち合わせた事項

- ・ 2017 年版採点規則および情報 26 号の確認 (2017 年版内規適用)
- ・ 評価ポイント
 - ・ 安定した演技実施を基盤に、美しさ力強さを表現し減点のない動きだけでなく、魅せる捌き
 - ・ 高められた D スコアを有する演技
 - ・ 腰高で大きく降り回った、向きの正確な旋回技を評価する
 - ・ 振動倒立技においてスピードのある上昇局面、腰のまがりの少ない実施を評価する
 - ・ 片足振動技において、単純な脚の入れ抜きにおいても、大きさを表現した捌きを求める
 - ・ 縦向き旋回技において正確な縦向きや手のずらしの少ない実施を評価する

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ グループⅡ・Ⅲの技 (D コンバイン, ウ・グオニアン) の後に旋回につなげられず落下したため難度不認定とした。それぞれ所属のコーチから正面支持まではいったので難度認定されるのではないかとの問い合わせがあったが、情報 26 号にて「グループⅡ・Ⅲの技は難度表に記載のある技に続ける必要がある」と明記されていることを説明した。
- ・ 終末技において、倒立下りで「肘がまがり肩倒立になる」(2 名)、「馬体を蹴って倒立に上げる」(1 名)、「足先が 45° 以上下がる」(2 名)という理由で不認定となった選手が 5 名いた。

3. 実施された主な技 (D 難度以上の認定された技)

- ・ グループⅠ D) 正交差倒立 (2 名)、逆交差倒立 (26 名)
- ・ グループⅡ D) シュピンドル (1 名)、D フロップ (13 名)、D コンバイン (21 名)
E) ショーン (1 名)、ロシアン 1080° 転向 (1 名)、E フロップ (15 名)
- ・ グループⅢ D) ロス (16 名)、トンフェイ (4 名)、マジヤール (とび前移動含む) (14 名)
シバド (35 名)
E) ウ・グオニアン (2 名)、開脚旋回縦向き 3/3 前移動 (2 名)
開脚旋回縦向き 3/3 後ろ移動 (2 名)
- ・ グループⅣ D) 下向き逆移動 (DSA) 倒立 3/3 部分移動下り (30 名)

E) 下向き逆移動 (DSA) 倒立 450° ひねり 3/3 部分移動下り (6名)

4. Dスコア・Eスコア

- ・Dスコア 6.0 (1名)、5.5-5.9 (7名)、5.0-5.4 (3名)、4.5-4.9 (12名)
4.0-4.4 (18名)、3.9以下 (19名)
- ・Eスコア 8.5以上 (4名)、8.0-8.45 (14名)、7.5-7.95 (17名)
7.0-7.45 (11名)、6.0-6.95 (9名)、5.95以下 (5名)

5. 得点上位者 (3位まで) の演技構成

1位 石澤大翔 (清風) D : 5.9 E : 8.55 F : 14.45

交差倒立 (I-D)、Eフロップ (II-E)、Dコンバイン (II-D)、ロス (III-D)、縦向き開脚シュ
ピンデル (II-D)、開脚旋回縦向き 3/3 前移動 (III-E)、開脚旋回縦向き 3/3 後ろ移動 (III-E)、
一把手上縦向き旋回 (II-B)、下向き転向 (II-B)、下向き逆移動倒立 3/3 部分移動下り (IV-D)

2位 三輪 哲平 (清風) D : 5.5 E : 8.6 F : 14.10

逆交差倒立 (I-D)、横向き旋回 (II-A)、Eフロップ (II-E)、Dコンバイン (II-D)、
ロス (III-D)、とび前移動 (III-D)、シバド (III-D)、一把手上縦向き旋回 (II-B)、
フカガ (II-B)、下向き逆移動倒立 450° ひねり 3/3 部分移動下り (IV-E)

3位 橋本大輝 (市立船橋) D : 5.8 E : 8.1 F : 13.90

逆交差倒立 (I-D)、下向き転向 (II-B)、Eフロップ (II-E)、Dコンバイン (II-D)、ロス (III
-D)、一把手上縦向き旋回 (II-B)、開脚旋回縦向き 3/3 前移動 (III-E)、開脚旋回縦向き 3/3 後
ろ移動 (III-E)、縦向き 1/2 前移動 (III-B)、下向き逆移動倒立 450° ひねり 3/3 部分移動下り
(IV-E)

6. 所感

59名の演技者のうち17名が1回以上の落下をしており、終末技の倒立下りでの失敗なども含めて不安定な演技が多くみられた。また、縦向き移動技での正しい向きからの逸脱や腰がまがった旋回での技の実施、特に演技後半の旋回技でのあん馬への接触(脚すり)などが目立った。一方でEスコアが8.5以上の4選手はDスコアも5.1以上あり、質の高い旋回で高難度の技を実施できていた。

59名中28名と約半数の選手がD難度の交差技を実施するようになったことはDスコアを高めるといふ国内の強化方針に沿った良い傾向である。また、上位選手では腰のまがりや力の使用が少ない良い実施も見られてきた。しかし、脚の入れ抜きの大きさまで意識できている実施はまだ少ないのが現状である。旋回技だけでなく、片足振動技においても魅せる捌きを徹底し、美しい体操を追及してもらいたい。

《つり輪》

D1E1 倉島 貴司

1. 会議で打ち合わせた事項

高校生の試合ではあるものの、一般ルールの試合であること、2018年最初の試合であることを考慮して、実施の正確さに重点をおき、正確で安定した実施を求めていくことを確認した。

- * 技と技をつなぐ部分の肘まがり（懸垂～逆懸垂への引き上げ時、水平支持や十字懸垂から懸垂や逆懸垂へのつなぎ、前振り上がり脚前挙や後ろ振り上がり水平支持などの上昇局面）は、減点の対象となる。
- * ジョナサンやヤマワキにおいて、停滞や支持する力を使用することによって捌く実施は減点の対象となり、明らかな支持が見られた場合、不認定となる。
- * アザリアンなど、ゆっくりと力静止技に持ち込む動きにおいて早く捌いたものは減点の対象であり、明らかに反動を用いたものはグループⅢの技として判定することがある。
- * 振動からの力静止技において、最終的な静止位置より上から下ろしてくる捌きや、一旦静止位置に来てから下がる、上がるなどして戻すような動きについても、減点になる。
- * 倒立の姿勢（体の反り、肘のまがりや肩角度など）も評価の対象となる。単純に止まっているだけで減点なしとはならない。
- * 車輪、懸垂回転技における屈腕はもとより、不必要な体の反り、腰まがりについても減点の対象となる。

2. 所感

本競技会が開催される3月は年度最後の競技会であるが、2018年度シーズン最初の試合とも言える。それと同時に、これから夏のシーズンに向けてベースとなる演技をつくる大事な時期でもある。その観点から鑑みると一つ一つの技の仕上がりが十分に達しておらず、習熟度が低いと感じられた。Dスコアが高くない技でまとめられた構成であるならば、それぞれの技は高い完成度で発表されるべきである。

A 難度の脚前挙の姿勢や静止時間、倒立の姿勢や持ち込む段階での肘のまがり、ベルトへの寄りかかり、振動倒立へ持ち込む捌きでの体の反りや肘のまがり。いずれも中学生選手でも実施することができる技である。しかし上位の数名を除いて、これらの基本技が高校生で既に身につけておくべき習熟度に達していないというのが正直な感想である。積極的な高難度への挑戦が見られなかっただけに、Eスコアまでも低いというのは、春先とは言え反省点と言わざるを得ない。着地の精度の低さもそのあたりの意識を物語っている。この仕上がりに技を組み入れてもEスコアが下がるのは容易に想像ができる。まずは、Dスコアを上げる前に基本的な技の姿勢や着地などのベーシックなトレーニングをしっかりとやり直していかなければならないと感じた。

実施の理想像は、「正しい姿勢」で、「振動技は振動で、力技は力で行い」、「不必要な肘まがりを使わず」「安定した着地」まで持ち込んで発表していただきたい。そのあたりを丹念にクリアして初めて、Dスコアの向上に着手していくべきではないかと考える。

《跳馬》

D1E1 佐々木 彰文

1. 会議で打ち合わせた事項

- ・2017年版採点規則および情報26号の確認（2017年版内規適応）

【全体として】

2020年東京五輪で目標を実現するには「美しい体操」をより昇華し、「魅せる体操」を体現できるようにすることが必須である。そのためには、Dスコアを向上させながらも、減点のない捌きだけで満足するのではなく、細部にわたる動きの表現までも工夫し、味わいや深みを醸し出し、観衆を魅了し感動を与える演技を追求すること

- ① 安定した演技実施を基盤に、美しさ、力強さを表現し減点のない動きだけではなく、魅せる捌きの推奨
- ② 高められたDスコアを有する演技
- ③ 着地への準備局面を有し意識的に静止に持ち込められる着地

【種目特有の評価ポイント】

- ① 安定感・確実性のあるDスコア5.6以上の超越技
- ② 準備局面を示した意識的に静止に持ち込める超越
- ③ 空中局面での膝まがり足割れに対して厳しく採点する
- ④ カサマツ系での垂直面からの外れについて厳しく採点する

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ユルチェンコ跳びにて手が滑り、胴体着地ともみられる実施があった
ほんの僅かであるが足先からの着地であったと認められたので、不成立とはせず認定した

3. 実施された主な技

- ・グループ1：前転とび前方伸身宙返りひねり
- ・グループ2：伸身カサマツとび・伸身カサマツ1/2ひねり・伸身カサマツ1回ひねり
伸身カサマツ3/2ひねり（ドリッグス）
- ・グループ3：伸身ユルチェンコ1回ひねり・伸身ユルチェンコ2回ひねり
伸身ユルチェンコ5/2ひねり（シューフェルト）

4. Dスコア・Eスコア・ライン減点

- ・Dスコア： D5.2 12名 ・D4.8 24名 ・D4.4 6名 ・D4.0 14名
- ・Eスコア： 9.0以上 13名 ・8.6-8.9 35名 ・8.2-8.5 4名 ・8.1以下 4名
- ・ライン減点：0.1減点 7名 0.3減点 9名

5. 得点上位者（3位まで）の演技構成

1位	橘 汐芽	（ 松陰 ）	シューフェルト	D5.2	E9.3	F14.500
2位	三輪 哲平	（ 清風 ）	ドリッグス	D5.2	E9.2	F14.400
3位	村山 覚人	（ 市船 ）	ドリッグス	D5.2	E9.15	F14.350
3位	岩川 秀磨	（ 関西 ）	シューフェルト	D5.2	E9.15	F14.350
3位	森川 顕範	（ 関西 ）	ドリッグス	D5.2	E9.15	F14.350

6. 所感

演技を実施した56名を対象に振り返ると、価値点5.2を上回る跳越は見られず、上位選手では、価値点5.2のドリッグス（9名）とシューフェルト（3名）の実施における着地のまとまりが順位を序列づける大きな要因となった。

全体として、第一空中局面での入りの脚割れに対する減点が多く見られたが（39名）、上位選手

には非常に少なかったことから日頃の練習から意識をもって取り組んでいると察しられた。第二空中局面での高さ不足・捻りでの脚割れや乱れは多くに見られた。その中でも上位選手においては、着地への準備局面で先取りが明確に表現されており、丁寧にまとめた実施を見ることができたのは非常に印象的である。

ライン減点では16名の跳越で対象となったが、この0.1、0.3を減点されてしまう代償の大きさを感じてもらい、これからの対策を期待する。

今後、価値点の高い跳越技へと取り組む際にも、第一空中局面での脚割れ、第二空中局面での雄大な高さ、着地への十分な準備局面を示す捌きなど、実施への意識付けを常に心がけていただき、日々の練習から取り組んで欲しい。そして、これからの日本を背負う選手として将来に活かしてもらいたい。

《平行棒》

D1E1 吉田 義経

1. 会議で打ち合わせた事項

- ・ 2017年版採点規則および情報26号の確認（2017年版内規適用）
- ・ 評価ポイント
 - * 安定した演技実施を基盤に、美しさ力強さを表現し減点のない動きだけでなく、魅せる捌き
 - * 高められたDスコアを有する演技
 - * 着地への準備局面を有し意識的に止められる終末技
 - * 倒立位を経過する振動技で角度減点の無い安定した実施
 - * 振幅の大きさや雄大な空中局面を示した実施
- ・ 振動から倒立を経過する技は、15°未満の角度逸脱であっても減点となり、それは、流動的でありながら意図すれば静止できる実施が望ましい
- ・ 倒立位での握り直しは毎回減点の対象となる
- ・ 技の認定についての確認
 - * 静止技での静止時間：2秒未満の場合は減点(0.30)、静止がない減点(0.50：難度不認定)
 - * その他種目特有の減点、E審判の減点項目についての確認

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ ティップペルトにおいてバーに脚が乗った実施を難度不認定とした(4名)
- ・ その他、不認定とした技（B難度以上で10技にカウントされる予定であった技）
 - ・ 後ろ振り上がり開脚入れ伸腕支持(1名)、モイ(1名)、ケンモツ(1名)、
 - 単棒横向き開脚浮腰支持経過倒立(1名)、棒下宙返り倒立(1名)

3. 実施された主な技（D難度以上の認定された技）

- ・ グループⅠ E) マクーツ(1名)
 - D) 前振り1/4ひねり単棒倒立(5名)、ディアミドフひねり(1/4)(3名)、
 - ヒーリー(17名)、前方宙返り開脚抜き腕支持(15名)
- ・ グループⅡ D) ハラダ(5名)、後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持(14名)
- ・ グループⅢ E) バブサー(4名)、棒下宙返りひねり倒立(6名)
 - D) ティップペルト(26名)、車輪ディアミドフ(1名)、ペーレ(3名)、
 - 懸垂前振り後方かかえ込み宙返りひねり腕支持(7名)、棒下宙返り倒立(24名)

・グループⅣ (60 演技)

F) 前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り(2 名)

E) 前方かかえ込み 2 回宙返り下り(1 名)

D) 後方屈身 2 回宙返り下り(48 名)

C) 前方伸身宙返り 1 回ひねり下り(1 名)、後方かかえ込み 2 回宙返り下り(5 名)

その他) 未実施(1 名)、0 点演技(2 名)

4. D スコア・E スコア

・D スコア 5.5 以上(6 名)、5.0-5.4(11 名)、4.5-4.9(15 名)、4.0-4.4(15 名)、3.0-3.9(10 名)
2.0-2.9(1 名)

・E スコア 8.5 以上(4 名)、8.0-8.45(14 名)、7.5-7.95(21 名)、7.0-7.45(12 名)、6.0-6.95(6 名)
5.0-5.95(1 名)

5. 得点上位者 (3 位まで) の演技構成

1 位 三輪 哲平 (清風) D : 5.8 E : 8.55 F : 14.350

棒下振り出し腕支持(Ⅲ-A)、後ろ振り上がり前方屈伸宙返り支持(Ⅱ-D)、マクーツ(Ⅰ-E)、
ヒーリー(Ⅰ-D)、棒下宙返り倒立(Ⅲ-D)、ベーレ(Ⅲ-D)、バブサー(Ⅲ-E)、ティッペルト(Ⅲ-D)、
前振りひねり倒立(Ⅰ-C)、後方屈身 2 回宙返り下り (Ⅱ-D)

2 位 安達 太一 (市立船橋) D : 5.7 E : 8.55 F : 14.250

後ろ振り上がり前方屈伸宙返り支持(Ⅱ-D)、ヒーリー(Ⅰ-D)、棒下宙返り倒立(Ⅲ-D)、
ケンモツ(Ⅲ-C)、モイ(Ⅲ-C)、バブサー(Ⅲ-E)、ティッペルト(Ⅲ-D)、前振りひねり倒立(Ⅰ-C)、
ディアミドフ(Ⅰ-C)、後方屈身 2 回宙返り下り (Ⅱ-D)

3 位 中山 怜 (鯖江) D : 5.5 E : 8.35 F : 13.850

後ろ振り上がり倒立(Ⅱ-B)、棒下宙返り倒立(Ⅲ-D)、ケンモツ(Ⅲ-C)、
懸垂前振り後方かかえ込み宙返りひねり腕支持(Ⅲ-D)、ヒーリー(Ⅰ-D)、モイ(Ⅲ-C)、
ティッペルト(Ⅲ-D)、前振りひねり倒立(Ⅰ-C)、前方宙返り開脚抜き腕支持(Ⅰ-D)、
後方屈身 2 回宙返り下り (Ⅱ-D)

6. 所感

今大会 58 名の演技のうち、決定点が 13.00 を超えた選手が 11 名、そのうち 13.50 以上が 7 名、
14.00 を超えた選手が 2 名であった。D スコアにおいては 5.0 以上が 17 名、そのうち 5.5 以上が
6 名であった。また、カウントされる 10 技を B 難度以上で構成していた選手が 6 名いたことは D
スコアを高める上で明るい兆しと言えるだろう。

種目別順位による D スコア・E スコアを比較してみると、上位 3 名の平均は、D スコア 5.67 点、
E スコア 8.48 点と非常に高い。4 位から 10 位までの平均は、D スコア 5.11 点・E スコア 8.27 点
である。これに対して 11~20 位までの平均は、D スコア 5.10 点・E スコア 7.65 点であった。

この 2 つの集団を比較すると、D スコアに関してはほとんど差が見られないが、E スコアにおい
ては明確な差となって現れている。積極的に D スコアを高めようと努力してきたこともうかがえ
るが、演技の質や安定性が序列に影響したと言わざるを得ない。E スコアの減点で多く見られた
項目は、脚前挙や倒立などの静止の求められている技での静止不足、倒立での手のずらし、脚前挙
の姿勢不良 (脚の位置が高い等)、伸腕屈身力倒立で勢いをつける、正(逆)倒立ひねりでのひねり
後の倒立姿勢の不十分さ等である。いずれも、おろそかになってしまいがちな部分であるが、意識
すると改善できるところでもある。加えて、このルールにおいて E スコアに大きな影響を与える
のが着地である。終末技において着地を止めた選手が 4 名であったことは、少なさを感じた。

平行棒の演技において全体的な傾向としては、Dスコアの向上を積極的に取り組んでいると感じられた。今後は、さらなるDスコア向上を目指して取り組んでいただくとともに、Eスコア向上のためには、一つ一つの技を雄大に、かつ安定感を高め、細かい部分での些細な減点を無くすこと、終末技においては正確な捌きとともに着地を止める意識を常に心がけ日々の練習から励んでいくよう期待したい。

器具調整に関して。組最初の演技者や前の演技者の得点が早く公表された時の対応として、60秒を目途とし、選手・コーチに声をかけた。減点に該当するような選手はいなかったが、今大会に限らず、平行棒の演技が6種目で最後となり、ローテーション前に器具調整ができない状況や、スムーズな進行により予想以上に早く出番が回ってくることもありえる。その時の状況に応じて対応できるように普段から意識してもらいたい。

《鉄 棒》

D1 三富 洋昭

1. 会議で打ち合わせた事項

- ・2017年版採点規則および情報26号の確認。
- ・安定した演技実施を基盤に、高められたDスコアを有する演技を評価する。
- ・美しさ、力強さを表現した演技実施を評価する。
- ・着地への準備局面を有し意識的に止められる終末技を評価する。
- ・雄大な手放し技や正確な終末技を評価する。
- ・倒立位を経過する技、ひねりを伴う振動技での角度減点の少ない実施を評価する。
- ・その他
 - A) ひねりから(片)大逆手、倒立を経過する技の倒立位の角度、シュタルダー、エンドーの倒立位からの持ち込み、宙返りを伴う手放し技での車輪に続かない実施等、減点項目の確認。
 - B) ヤマワキは、上昇の仕方、腰のまがり具合、下向き転向の度合いを総合的に判断する。明らかな腰のまがりと下向き転向が見えた場合、ボローニンと判定する。
 - C) 終末技は後方伸身2回宙返り1回ひねりが多くなるが、宙返りの高さ・空中姿勢・着地などで格差をつける。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ヤマワキで明らかにバーを越える時に腰まがりが見えた実施はボローニンで認定した。
- ・伸身トカチェフで腰をとる場合は、伸身の範囲でバーを越えていればD難度で認定し実施の減点とした。
- ・手放し技でバーにぶつかり顔面を負傷した選手について、コーチからの申し出により、審判長の許可を得てその組の最後に続行を認めた。

3. その他特記事項

■得点上位者(3位まで)の演技構成

1位 石澤 大翔(清風) 13.900 (D:5.4 E:8.50)

後ろ振り上がり倒立(IA)、前方車輪、アドラー(III C)、大逆手車輪(IB)、ポゴレロフ(II F) エンドー1回ひねり片大逆手(III C)、アドラーひねり倒立(III D)、シュタルダーとび3/2ひねり片大逆手(III D)、ヤマワキ(II D)、エンドー(III B)、後方伸身2回宙返り2回ひねり下り(IV E)

2位 橋 汐芽 (松蔭) 13.850 (D : 5.3 E : 8.55)

アドラーひねり倒立 (ⅢD)、伸身トカチェフ (ⅡD)、トカチェフ (ⅡC)、リンチ (ⅡD)、エンドー1回ひねり大逆手 (ⅢD)、アドラー (ⅢC)、大逆手車輪 (ⅠB)、エンドー (ⅢB)、シュタルダー (ⅢB)、後方伸身2回宙返り2回ひねり下り (ⅣE)

3位 安達 太一 (市立船橋) 13.800 (D : 5.1 E : 8.70)

ヤマワキ (ⅡD)、エンドー (ⅢB)、アドラーひねり倒立 (ⅢD)、伸身トカチェフ (ⅡD)、トカチェフ (ⅡC)、シュタルダー (ⅢB)、シュタルダーひねり倒立 (ⅢB)、アドラー (ⅢC)、大逆手車輪 (ⅠB)、後方伸身2回宙返り2回ひねり下り (ⅣE)

■Dスコア分布

5.6 (2名 3.4%)	5.4 (3名 5.2%)	5.3 (2名 3.4%)	5.1 (5名 8.6%)	5.0 (5名 8.6%)
4.9 (2名 3.4%)	4.8 (1名 1.7%)	4.7 (5名 8.6%)	4.6 (4名 6.9%)	4.5 (4名 6.9%)
4.4 (7名 12.1%)	4.3 (1名 1.7%)	4.2 (3名 5.2%)	4.1 (3名 5.2%)	
3.9以下 (11名 19.0%)				

■実施された主な技 (D 難度以上)

【グループⅠ】 リバルコ : D (1名)

【グループⅡ】 ヤマワキ : D (37名)、伸身トカチェフ : D (16名)、コールマン : E (6名)、コバチ : D (6名)、リンチ : D (2名)、カッシーナ : G (1名)、ポゴレロフ : F (1名)

【グループⅢ】 シュタルダーとび 3/2 ひねり片大逆手 : D (8名)
エンドー1回ひねり大逆手 : D (3名)、アドラーひねり倒立 : D (24名)
アドラー1回ひねり片逆手倒立 : D (1名)
アドラー1回ひねり逆手倒立 : E (1名)

【グループⅣ】 後方伸身2回宙返り1回ひねり下り : D (38名)
後方伸身2回宙返り2回ひねり下り : E (12名)
後方かかえ込み3回宙返り下り : F (1名)

4. 所感

Eスコアでは、最高得点が8.70点であり、8.50点以上は3名、8.00～8.45までは22名、7.50～7.95が15名、7.00～7.45が7名であった。

シーズン最初の競技会でもあり、これから習熟度が高まっていくであろう演技実施や、新たに習得した技を入れ、果敢に挑戦してくる演技を多く見ることができた。手放し技等で落下のあった選手は11名とやや多かったが、今後、雄大かつ安定性が高まった実施を期待したい。残念ながら、手放し技の連続は見られなかった。

着地で止まった選手は13名、転倒や支えなど1.0の減点を伴った選手は3名であった。着地についてはより厳密と判定することとなったなか、丁寧な実施を心がける終末技は多くみられた。ただし、止まっても足幅が広がったり、腕を回す、お辞儀しているように上半身が前屈みになるなど、複数の項目による減点を受けてしまった実施が大半であった。全体的に、ひねりから(片)大逆手や倒立を経過する技の倒立位からの角度減点、手放し技や終末技の前の車輪の膝まがり、終末技の伸身姿勢の不十分さが多く散見された。現行ルールによって実施の評価がより厳密になるなか、Dスコアを高めていく一方で難度の獲得のみならず一つ一つの技の完成度を高めていくよう練

習に励んでいただきたい。